

# 父親の子育て参加と家族のあり方

諸藤絵美

## 1. はじめに

厚生労働省の人口動態統計によると、2005年は出生数が死亡数を下回ると推定され、統計をとりはじめてから初めて、日本の人口が自然減となる見込みである。ついに人口減少時代に入ることになった。

少子化に関しては、その原因や対策など様々に論議されてきており、平成16年度の少子化社会白書では、少子化の直接の原因として「未婚化の進展」「晩婚化の進展」「夫婦の出生力の低下」を上げている<sup>1)</sup>。2004年12月に実施した「現代日本人のライフスタイル2004」調査の結果報告では、晩婚化の背景にある人々の意識について考察し、女性の半数は「心をなごませる家族」を幸福感が得られる第一条件としているにもかかわらず、現実には家族を持つと、家事や育児が女性に集中し、子育てにストレスを感じている女性が多いという結果を紹介した<sup>2)</sup>。

本稿では、この子育ての負担に関して、さらに分析を加えた結果を報告する。「現代日本人のライフスタイル2004」調査では、子育てを夫婦がどのように分担しているかについて質問している。この分担の程度と結婚観や子どもを持つことに関する意識との関連をみた結果、夫が子育てを担うかどうか、家族のあり方に関する意識と関連することが浮かび上がった。

本稿は、少子化対策に関して論じるものではないが、妻の子育ての負担軽減は少子化対

策の中でも指摘されており、少子化に関する論議の参考にもなると考えている。

## 2. 父親の子育て参加の意義

### 少子化対策の流れ

1990年に合計特殊出生率(女性が生涯に産む子どもの人数)が1.57にまで下がったいわゆる「1.57ショック」以来、政府は様々な少子化対策を実施してきた。1992年に育児休業法が施行され、男女を問わず、子どもが1歳に達するまでの間、一定期間の休暇をとることが認められた。1994年のエンゼルプラン、1999年の新エンゼルプランを通じて、子育て支援サービスの充実、仕事と子育ての両立のための雇用整備などがすすめられた。この間、保育サービスの計画的な整備がすすめられ、さらに2001年度からは「待機児童ゼロ作戦」の推進も加わり、行政による子育て支援の当初の計画目標は多くの事業ではほぼ達成された。

それらの施策や支援にもかかわらず、少子化の進展に歯止めがかからなかった。平成17年度の少子化社会白書では、その背景として、次の3点を上げている<sup>3)</sup>。

①子育て期にある30歳代男性の4人に1人は週60時間以上就業しているなど、育児期に子どもに向き合う十分な時間を持つことができない働き方となっており、依然として子育ての負担が女性に集中する

結果となっていること。また、育児休業制度など子育てと就業の両立を目指した諸制度も十分な活用が進んでいないこと。

- ②一時保育や地域子育て支援センターなど地域の子育てを支えるサービスが十分に行き渡った状況にはなっていないこと。
- ③若者が社会的に自立し、家庭を築き、子どもを生み育てることが難しい社会経済状況となっていること。

そして2005年4月施行の「次世代育成支援対策推進法」では、従来の子育てと仕事の両立支援に加え「男性を含めた働き方の見直し」の取組みも盛り込まれている。具体的には301人以上の労働者を雇用する事業主は、育児休暇取得に向けた取組みなど、国の行動計画策定指針に即して、労働者の仕事と家庭の両立を図るために必要な雇用環境の整備等に関する目標と目標達成のための対策等を定めた一般事業主行動計画の策定を義務付けられることとなった。

父親が子育てを担えるように働き方を変えていこうというのである。

### 父親の育児推奨論の視点

それでは、父親が子育てをすることにはどんな意義があるのだろうか。その意味合いは、単に女性の負担軽減だけではない。

父親(男性)の育児や子育てへの参加を求める論議(=父親育児推奨論)を分析した内田哲郎は、1990年代以降の父親育児推奨論の内容を整理して、次の3つにまとめた<sup>4)</sup>。

- ①父親不在論、父性喪失論、父性復権論にみられる父親育児推奨論。子どもの教育・家庭教育での「父性」の弱体化を問題にし、父親が家庭の教育・しつけにもっと関わ

ることを求める論調である。

- ②フェミニズムや男女平等の主張からの父親の育児をもとめる声。「男女平等の実現」や「母親・妻(パートナー)の負担の軽減」が、父親が育児や子育てに関わるべき理由として展開される。
- ③男性運動にみられる「父親育児推奨論」。男性解放、男女平等、仕事優先社会へのアンチテーゼを理由づけとして、父親の子育てを「自分自身の生き方の問題」として位置付け、男性が主体的に関わることで、人間らしく、自分らしく生きていこうという立場。

また家族社会学の渡辺秀樹は「父親をすることの意味」について、5つの論点を提示している<sup>5)</sup>。

- ①母親だけでなく、父親もかかわることが、子どもの発達に良い影響をもたらす。
- ②父親が関わることで、母親にゆとりをもたらす。その結果、夫婦の間にコミュニケーションが生まれる。
- ③仕事だけでなく、子どもにかかわり家庭にかかわるとい生活スタイルの意義をみいだすことになる。
- ④家庭を社会に開き、地域の親たちとかかわり、地域の子どもたちの父親になる。
- ⑤父親をすることで、夫婦の、あるいは男女の新しい関係の構築につなげる。ときに母親が主役を演じることもあり、父親が脇役のこともあるという、柔軟な男女関係が子どもに伝わる必要があるとしている。

本稿では、内田や渡辺が整理した論点も参考にして、父親が子育てに参加する場合と参加しない場合で、夫と妻のそれぞれの考え方や価値観に違いがあるのかどうかを検討していく。

### 3. 育児参加と結婚観、家族観

#### 子育ての分担

「現代日本人のライフスタイル 2004」調査には、夫婦の子育ての分担について聞いた質問がある。子どもを持つ人に、「あなたのご家庭ではどのように子育てをなさっていますか」と尋ね、5つの選択肢の中から1つ選んでもらった。

- ・「ほとんど妻ひとりで子育てをしている (いた)」 = 《ほとんど妻》が24%、
- ・「妻が中心となって子育てをしている (いた) が、夫も何かと手伝っている (いた)」 = 《夫も手伝う》が54%、
- ・「子育てに、夫も妻も同じくらいかかわっている (いた)」 = 《夫も妻も同じくらい》が20%、
- ・「夫が中心となって子育てをしている (いた) が、妻も何かと手伝っている (いた)」 = 《妻も手伝う》が1%、
- ・「ほとんど夫ひとりで子育てをしている (いた)」 = 《ほとんど夫》は0%

という結果が得られた。

夫中心の子育てをする家庭はごく少数なので分析からは省き、子育ては《ほとんど妻》の女性(214人)、《夫も手伝う》女性(422人)、《夫も妻も同じくらい》の女性(157人)、そして《ほとんど妻》の男性(128人)、《夫も手伝う》男性(341人)、《夫も妻も同じくらい》の男性(119人)に分類して、結婚の評価、子育ての意識などについて分析した。

子育ての分担について、性年層別(表1)にまとめた。男女ともに年齢層が高くなるにつれて、「ほとんど妻」と答えた人の割合が高くなる傾向があり、70歳以上の男性が30%、女性が35%で、それぞれ男性全体、女性全体より有意に高い。一方「夫も手伝う」と答えた人は年齢が高くなるにつれ、少なくなる傾向がある。

結婚の評価や子育てに関する意識と子育ての分担との関係进行分析にあたっては、この年齢層による違いに留意する必要がある。若い夫婦ほど父親が子育てに参加しているという傾向があるため、若年層と高年層に分けて分析を行った。その結果、分析対象の人数が少なくなることもあって、有意な差は出ない項目はあるものの、回答傾向は若年層と高年層で

表1 夫婦はどのように子育てを分担しているか (子どものいる男女)

	男 性					
	全体	16～39歳	40代	50代	60代	70歳以上
分母 =	597人	66	96	141	155	139
ほとんど妻	21%	12	16	18	24	30
夫も手伝う	57	70	61	57	56	50
夫も妻も同じくらい	20	17	22	23	19	18
妻も手伝う	1	2	1	1	1	1
ほとんど夫	0	0	0	1	0	0

  

	女 性					
	全体	16～39歳	40代	50代	60代	70歳以上
分母 =	806人	141	161	166	178	160
ほとんど妻	27%	15	25	31	25	35
夫も手伝う	52	65	51	52	49	47
夫も妻も同じくらい	19	21	23	17	22	14
妻も手伝う	0	0	1	0	1	0
ほとんど夫	0	0	0	0	0	0

\* 網掛けは全体に比べて有意に多いことを、下線は少ないことを示す (信頼度95%、以下同様)  
 \* 男性全体 (597人) は子どものいる男性全体、女性全体 (806人) は子どものいる女性全体を示す (以下同様)

概ね共通していた。したがって、結婚の評価や子育てに関する意識と子育ての分担との関係は、年齢層の反映ではないことがわかった。

## 結婚の評価

まず結婚をプラス面が大きいと受け止めるか、マイナス面が大きいと受け止めるかという結婚の評価と子育ての分担との関連をみる(表2)。

女性では、結婚による「プラス面のほうが大きい」と答えた割合が、《ほとんど妻》の人は37%、《夫も手伝う》の人は51%、《夫も妻も同じくらい》の人は65%となっていて、夫が子育てに参加しているほど結婚をプラスに評価するという傾向が明確に出ている。

男性に関しては、「プラス面のほうが大きい」と答えた割合は、《ほとんど妻》の人が56%、《夫も手伝う》の人が62%、《夫も妻も同じくらい》の人が68%で、有意な差はないものの、夫が子育てに参加しているほど結婚をプラスに評価するという傾向は読み取れる。

次に、子育ての分担の程度によって、具体的にどのような点を結婚のプラス面と捉えているかに違いがあるかどうかをみた(表3)。

男性については3項目で有意な差があっ

た。《ほとんど妻》の人では、「老後の面倒をみてもらえる」が全体より高く、「心のよりどころが得られる」と「夫婦で互いに高めあい、人間として成長できる」が全体より低くなっている。一方、《夫も妻も同じくらい》という人では「夫婦で互いに高めあい、人間として成長できる」を上げた割合が全体より高い。

妻と同じぐらい子育てを分担していると答えている男性は、「夫婦で高めあう」といったいわば精神的なものを結婚のプラス面として評価する傾向がうかがえ、ほとんど妻まかせという男性は逆に精神的なものの評価が低い傾向が読みとれる。

次に女性についてみてみよう。《ほとんど妻》という人では、「子どもや家族を持てる」と「心のよりどころが得られる」それに「夫婦で互いに高めあい、人間として成長できる」が全体より低く、「親や周囲にこたえられる」が全体より高い。一方、《夫も妻も同じくらい》という人では、「心のよりどころが得られる」が全体より高くなっている。

男性と同様に、子育てをほとんど妻が担っているという女性で「心のよりどころ」といった精神的なものの評価が低い傾向がみられる。

表2 子育て分担と結婚はプラスマイナスどちらが大きい

	男 性			
	全体	ほとんど妻	夫も手伝う	夫も妻も同じくらい
分母 =	597 人	128	341	119
プラス面のほうが大きい	63%	56	62	68
どちらかという、プラス面のほうが大きい	32	35	33	24
どちらかという、マイナス面のほうが大きい	2	6	1	3
マイナス面のほうが大きい	2	2	2	2

  

	女 性			
	全体	ほとんど妻	夫も手伝う	夫も妻も同じくらい
分母 =	806 人	214	422	157
プラス面のほうが大きい	50%	37	51	65
どちらかという、プラス面のほうが大きい	38	42	40	27
どちらかという、マイナス面のほうが大きい	7	11	6	4
マイナス面のほうが大きい	2	3	1	1

表3 子育て分担と結婚のプラス面(3つまで複数回答)

	男 性			
	全体	ほとんど妻	夫も手伝う	夫も妻も同じくらい
分母 =	597人	128	341	119
好きな人と一緒に生活できる	36%	34	35	41
社会的信用が得られる	41	43	40	40
子どもや家族を持てる	66	63	68	58
経済的に安定する	8	9	8	8
老後の面倒をみてもらえる	16	24	14	10
家事の負担が減り、生活の上で便利になる	9	11	9	7
心のよりどころが得られる	47	36	51	46
親や周囲の期待にこたえられる	5	6	6	3
親から独立できる	6	6	5	8
夫婦で互いに高めあい、人間として成長できる	38	25	39	46
特にプラスの面はない	1	2	1	1

  

	女 性			
	全体	ほとんど妻	夫も手伝う	夫も妻も同じくらい
分母 =	806人	214	422	157
好きな人と一緒に生活できる	33%	31	33	34
社会的信用が得られる	26	27	25	24
子どもや家族を持てる	70	65	75	67
経済的に安定する	22	25	21	20
老後の面倒をみてもらえる	9	8	9	10
家事の負担が減り、生活の上で便利になる	2	3	2	1
心のよりどころが得られる	52	44	53	60
親や周囲の期待にこたえられる	4	7	4	2
親から独立できる	9	10	8	9
夫婦で互いに高めあい、人間として成長できる	46	40	47	52
特にプラスの面はない	1	1	1	0

### 子どもを持つことの評価

それでは、子育ての分担と子どもを持つことで得られるものの評価には関連があるだろうか(表4)。

女性では、《ほとんど妻》という人で「得られるものが大きい」を上げた割合が59%に対し、《夫も妻も同じくらい》では73%で、《ほとんど妻》という人より《夫も妻も同じくらい》という人のほうが、子育てをプラスに評価する傾向が出ている。

男性でも「得られるものが大きい」と答えた割合は《ほとんど妻》の人の61%と《夫も妻も同じくらい》という人の74%には有意な差があり、子育てを分担している男性は子どもを持つことをよりプラスに評価する傾向がみられる。

調査では、子どもはどのような存在だと思うかという質問をして、子どもを持つ意義を聞いている。この質問と子育ての分担との関連性を

調べた(表5)。有意な差があらわれた項目は女性より男性のほうが多かった。「子どもはどのような存在か」という価値観は、男性自身が子育てをするかどうかで大きく異なるといえる。

《ほとんど妻》という男性では、「老後の面倒をみてくれる存在」を上げた割合が31%、「財産や家業などを引き継ぐ存在」が21%でそれぞれ全体より高く、「親を成長させる存在」は20%で全体より低い。一方、《夫も妻も同じくらい》という男性では、「家族との結びつきを強める存在」が77%、「親の夢や理想を託す存在」が20%で、それぞれ全体より高い。この他「次の社会を担う存在」や「友人などのネットワークを広げる存在」を上げた割合も《夫も妻も同じくらい》という男性で多いという傾向が出ている。

女性については、「親を成長させる存在」を上げた割合が《ほとんど妻》という人で全体

表4 子育て分担と子どもを持つ評価

	男 性			
	全体	ほとんど妻	夫も手伝う	夫も妻も同じくらい
	分母 =	597 人	128	341
得られるもののほうが大きい	68%	61	68	74
どちらかという、得られるもののほうが大きい	24	27	24	19
どちらかという、負担のほうが大きい	5	7	4	3
負担のほうが大きい	3	5	3	3

  

	女 性			
	全体	ほとんど妻	夫も手伝う	夫も妻も同じくらい
	分母 =	806 人	214	422
得られるもののほうが大きい	66%	59	67	73
どちらかという、得られるもののほうが大きい	27	31	28	20
どちらかという、負担のほうが大きい	5	7	3	4
負担のほうが大きい	1	1	1	1

表5 子育て分担と子どもとはどんな存在か(複数回答)

	男 性			
	全体	ほとんど妻	夫も手伝う	夫も妻も同じくらい
	分母 =	597 人	128	341
仕事や人生の励みになる存在	55%	51	55	62
老後の面倒をみてくれる存在	21	31	16	22
次の社会を担う存在	53	47	54	60
親の夢や理想を託す存在	14	9	13	20
財産や家業などを継ぐ存在	14	21	13	12
親に社会的信用を与える存在	9	9	9	8
家族との結びつきを強める存在	68	68	65	77
いざというときに頼りになる存在	36	39	34	35
友人などのネットワークを広げる存在	8	4	8	12
親を成長させる存在	32	20	37	34
この中にあてはまるものはない	1	2	1	1

  

	女 性			
	全体	ほとんど妻	夫も手伝う	夫も妻も同じくらい
	分母 =	806 人	214	422
仕事や人生の励みになる存在	54%	50	56	55
老後の面倒をみてくれる存在	16	16	14	16
次の社会を担う存在	45	46	44	45
親の夢や理想を託す存在	12	10	13	15
財産や家業などを継ぐ存在	9	11	8	6
親に社会的信用を与える存在	8	8	8	6
家族との結びつきを強める存在	72	70	73	75
いざというときに頼りになる存在	49	50	48	49
友人などのネットワークを広げる存在	13	14	15	11
親を成長させる存在	49	42	52	53
この中にあてはまるものはない	1	1	0	2

より低い。

男性に関しては、《ほとんど妻》という人で「老後の面倒」や「家業を継ぐ」といった現実的な項目が高く、《夫も妻も同じくらい》という人で「家族の結びつき」や「夢や理想を託す」といった精神的な項目が高い傾向がある。これは、結婚のプラス面に関しての質問と子育ての分担と

の関連で浮かび上がった傾向と共通している。

もう1つ、子どもを持つマイナス面についてみてみよう(表6)。子どもはどのような存在かという質問とは逆に、男性より女性のほうが子育ての分担による傾向の違いがはっきり出ている。

子育てが《ほとんど妻》という女性では「育児・教育の経済的負担が大きい」と「夫の支

表6 子育て分担と子どもを持つマイナス面（複数回答）

	男 性			
	全体	ほとんど妻	夫も手伝う	夫も妻も同じくらい
分母 =	597人	128	341	119
仕事が思うようにできない、仕事が継続できなくなる	4%	5	2	7
妊娠・出産時の体力的負担が大きい	3	3	3	4
育児の精神的負担が大きい	12	11	11	15
育児の体力的負担が大きい	6	7	6	8
育児・教育の経済的負担が大きい	28	23	29	29
やりたいことができなくなり、行動が制限される	15	16	15	16
自由な時間がなくなる	18	15	20	16
自分自身に気を使う余裕がなくなる	4	6	2	6
子どもがきちんと育つか不安になる	30	32	28	35
夫の支援が得られず、妻に負担が集中する	4	3	5	3
住居にじゅうぶんなスペースがなくなる	5	6	4	7
夫婦仲が悪くなくても、離婚がしにくくなる	7	12	4	10
特にマイナスになることはない	38	39	37	37

  

	女 性			
	全体	ほとんど妻	夫も手伝う	夫も妻も同じくらい
分母 =	806人	214	422	157
仕事が思うようにできない、仕事が継続できなくなる	25%	28	28	15
妊娠・出産時の体力的負担が大きい	15	13	17	13
育児の精神的負担が大きい	21	23	24	14
育児の体力的負担が大きい	13	14	13	12
育児・教育の経済的負担が大きい	32	39	32	25
やりたいことができなくなり、行動が制限される	24	28	25	17
自由な時間がなくなる	27	29	29	23
自分自身に気を使う余裕がなくなる	11	12	12	5
子どもがきちんと育つか不安になる	33	35	36	26
夫の支援が得られず、妻に負担が集中する	7	16	4	2
住居にじゅうぶんなスペースがなくなる	5	7	6	3
夫婦仲が悪くなくても、離婚がしにくくなる	9	14	9	6
特にマイナスになることはない	26	26	23	37

援が得られず、妻に負担が集中する」それに「夫婦仲が悪くなくても、離婚がしにくくなる」を上げた割合が全体より高い。一方、《夫も妻も同じくらい》という女性では、「特にマイナスになることはない」が37%で、全体より多く、また他のいずれの項目より多い割合となっている。「育児・教育の経済的負担が大きい」「子どもがきちんと育つか不安になる」「やりたいことができなくなり、行動が制限される」など7つの項目が全体より低い。

実際の子育ての負担をNHKの国民生活時間調査(2000年)の結果<sup>6)</sup>からみると、成人女性のうち平日に「子どもの世話」をしている人は20%に対して、成人男性で「子どもの世話」をしている人は6%にとどまっている。また

「子どもの世話」をしている人に限っての「子どもの世話」の平均時間は、成人女性の3時間28分に対して、成人男性は1時間17分と3分の1程度である。実際の子育ては女性が多く担っているのだから、《夫も妻も同じくらい》という女性が子どもを持つマイナス面を感じる事が少ないというのは当然とも言える。

注目すべきは男性のデータである。子育ての分担の程度によってマイナス面を上げる割合にあまり違いがない。妻と同じくらい分担している男性が子どもを持つマイナス面をより多く感じているという傾向はみられない。

また、《夫も手伝う》という男性では、「仕事が思うようにできない」の2%など3つの項目が全体より低い。これらの3つはとも

と全体でも上がる割合が低いものではあるが、働いている男性にとっては子育てを手伝う程度であれば、マイナスを感じる事が少ないという側面がうかがえる。

#### 4. おわりに

データの分析から明らかになったことを整理する。

- ・子育てを夫婦が同じくらいに分担しているという女性は、子育ての負担感が少ない。
- ・夫婦が同じくらいに分担しているという女性は、ほとんど妻という女性に比べ、結婚や子どもを持つことをよりプラスに評価している。
- ・子育てに参加している男性は、参加していない男性より「子どもを持つことで得られるものが多い」と感じる人が多い。
- ・男性の子どもに対する価値観は、子育てに参加するかどうかで大きく異なり、子育てに参加している男性は「親を成長させる存在」あるいは「家族の結びつきを強める存在」と肯定的に感じる人が多い。
- ・男性も女性も、夫婦が子育てを同じくらい分担している人で、結婚や子どもを持つことについて、精神的な面でプラスに評価する傾向がある。

2章の「父親の子育て参加の意義」の中で紹介したように、女性の負担軽減のためにだけ父親の子育て参加が推奨されているのではない。父親の子育てを「自分自身の生き方の問題」として位置付け、男性が主体的に関わることで、人間らしく生きていこうという主張や、仕事だけでなく子どもにかかわり家庭にかかわるとい生活スタイル、地域の親たち

とかかわり地域の子どもの父親になる、さらに父親をすることで、夫婦の、あるいは男女の新しい関係の構築につなげるといった意義が語られている。本稿で示した調査結果の分析は、このような主張や意義に関して、一定程度の裏づけとなるデータと言えよう。

「次世代育成支援対策推進法」で打ち出された「男性を含めた働き方の見直し」が少子化の対策として有効かどうかは、調査結果からは判断できない。また男性が子育てをするという行動によって結婚や家族に関する価値観が変わるとい側面と、もともとそうした価値観を持っている男性に子育てという行動が伴うという側面があり、どちらがより大きな影響があるかについては分析できていない。しかし、少なくとも男性が育児に積極的に参加することは、男性自身の生き方や家族のあり方と関連することは確かであり、重要な論点であることは間違いない。(もろふじ えみ)

#### 注 / 引用文献

- 1) 内閣府編『少子化社会白書(平成 16 年版)』(ぎょうせい, 2004 年)
- 2) 加藤元宣・諸藤絵美「幸せになりたいが、ためらう結婚」『放送研究と調査』2005 年 12 月号  
\* 「現代日本人のライフスタイル 2004」は、2004 年 12 月 10 日(金)から 12 日(日)の 3 日間、全国の 16 歳以上の男女 3,600 人(住民基本台帳から層化無作為 2 段抽出)に個人面接法で実施し、51.1%にあたる 1,838 人から有効回答を得た。
- 3) 内閣府編『少子化社会白書(平成 17 年版)』(ぎょうせい, 2005 年)
- 4) 内田哲郎「父親の育児?」『季刊家計経済研究』第 50 号(家計経済研究所, 2001 年)
- 5) 渡辺秀樹編『変容する家族と子ども』(教育出版, 1999 年)
- 6) NHK 放送文化研究所編『日本人の生活時間・2000 - NHK 国民生活時間調査 -』(NHK 出版, 2002 年)